

# フランスにおける「第3の人口転換」とムスリム移民2世における

## 宗教的食事制限の関連要因の変化

“Third Demographic Transition” and the Changes in Correlates of Religious Dietary Restrictions among Second-Generation Muslims in France

小島 宏 (早稲田大学)

Hiroshi KOJIMA (Waseda University)

[kojima@waseda.jp](mailto:kojima@waseda.jp)

**はじめに：**「第3の人口転換」とは D. Coleman (2006) が用いた言葉で、移民の流入とその高めの出生力や交婚により人口の民族別構成が転換することを指している。フランスの場合、戦後の一時期、南欧とアルジェリアから移民等が比較的多数流入したため、移民1世・2世全体に占めるムスリムの割合は比較的低かったし、ムスリムの中でもアルジェリア系の割合が高かった。しかし、第1次石油危機後、フランスも新規移民等の流入を制限したため、ムスリム諸国のモロッコ、チュニジア、トルコの出身者が留まり、家族再統合をした結果、移民1世・2世全体に占めるムスリムの割合が高くなるとともに、出生力転換のタイミングとスピードが異なっているため、ムスリム人口の中でも「第3の人口転換」が生じつつある。また、出生力転換の結果としてムスリム移民2世の兄弟姉妹構成も変化した。さらに、フランスの共和国理念に基づく「同化主義」的な社会統合政策との関連で、ムスリム移民とその子孫の社会統合の困難が政治問題化されているが、ムスリム人口の民族別構成や世代別構成だけでなく、兄弟姉妹構成の転換も関わっているように思われる。

**先行研究：**フランス国立人口研究所の M. Tribalat (2013) は、ムスリムの社会統合に関して政治問題化したものとして宗教的食事制限を取り上げ、1992年の MGIS 調査と 2008年の TeO 調査の結果をクロス表分析で比較し、食事制限の「再イスラーム化」は年齢効果というよりもコーホート効果によると述べ、若年層では民族間の違いは大きくないとしている。しかし、多変量解析でも同様の結果が出るかどうか分からない。他方、Rodier (2014) が面接調査の結果をまとめた表はフランスにおける前期中等教育在学中の次三男以下が「抗議者」類型のハラール食品消費行動をとる傾向があることを示した。

報告者は移民の社会統合指標の一つとしてのハラール食品消費行動の関連要因を分析してきたが (小島 2013)、小島 (2014) では「滞日ムスリム留学生調査」個票にロジット分析を適用し、ハラール食品店訪問頻度に対して出身国での男キョウダイの存在が弱い負の効果をもち、ハラールレストラン訪問頻度に対して女キョウダイの存在が負の効果をもつことを見いだした。そこで、(Kojima 2016、小島 2016) では主として独蘭白の TIES 調査 (2005～2007年) のマイクロデータを用い、ムスリム移民2世の社会統合の指標としての宗教的食事制限に関連する要因のうちで兄弟姉妹構成に焦点を合わせて分析をした。その際、フランスの TeO 調査のマイクロデータもあわせて分析したところ、平均キョウダイ数が他国より多いためか、男女いずれにおいても長子の正の主効果と2人キョウダイの長子の負の効果が見られ、女性では3人キョウダイの負の効果もみられた。

**分析方法：**そこで、本報告では MGIS 調査と TeO 調査のマイクロデータを用いてムスリム第 2 世代における宗教的食事制限に対する兄弟姉妹構成の影響について比較分析の結果を示すことにする。従属変数が MGIS では飲食物の制限の有無であるので、TeO では食物全般の制限の有無（もともとは順序尺度）として、2 項ロジット分析を用いることにした。両方の調査をできるだけ比較可能にするため、各種の微調整をした。MGIS の移民 2 世は 20～29 歳に限定されているので、TeO の年齢範囲をそれに合わせる限定を加えた。

MGIS では宗教の種類を聞いていないため、宗教があると回答した者のみを分析対象として、いずれかの親の出身国がムスリム国のアルジェリアかモロッコである者に限定した。そのため、親の出身国のコントロール変数が MGIS ではモロッコ、TeO ではトルコとなった。また、TeO では対象者が子どもの時の親の宗教重視を尋ねているが、MGIS ではないので、子どもの時の宗教教室通学をコントロール変数として用いた。その他のコントロール変数としては調査地、性別（両性の分析のみ）、年齢階級、民族内婚、近隣移民系住民過半数、学歴、母語教育、無業を用いた。

**分析結果：**まず、Tribalat の主張との関係で言えば、若年層でも民族間の差異があるということである。Tribalat が実施した MGIS においてさえモロッコ系は宗教的食事制限にアルジェリア系ほど熱心でない。また、MGIS でも TeO 年齢は宗教的食事制限に対して有意な効果を持っていない。しかし、MGIS で合わせて分析したラマダン中の断食に対しては 20 代前半であると実施する可能性が高まるので、宗教的食事制限を広く捉えれば、年齢効果がないとは言えないようである。また、コーホート効果があるかどうかは今回の分析対象者が 20 代のみで民族別構成がかなり異なるため、検討することができない。

兄弟姉妹構成の影響であるが、男女両性についての分析結果を見ると、MGIS でも TeO でも兄弟姉妹数が少ないほど宗教的食事制限に不熱心になる傾向が見られるが、TeO では兄弟姉妹数が 0～1 人を除き有意にならない。また、出生順位については MGIS で第 3 子が不熱心な傾向がみられるが、TeO では有意な効果がみられない。TeO の分析対象の年齢範囲を先行研究より狭くしたため、ケース数が減ったことにもよるのではないかと思われる。やはり年齢範囲を狭くしたためか、TeO では 2 人キョウダイの長子の負の効果は見られるが、長子の主効果はわずかなところで有意でないものの正になっている。しかし、MGIS では 2 人キョウダイの長子の負の効果は見られるが、長子の主効果は有意でない。

男子について見ると、MGIS では兄弟姉妹数が少ないほど宗教的食事制限に不熱心で出生順位が 1 位、2 位の者が不熱心な傾向が見られる。しかし、TeO では兄弟姉妹数が 2 人の場合に宗教的食事制限に熱心であるが、出生順位の影響がみられない。TeO では 2 人キョウダイの長子の負の効果は見られるが、MGIS では見られない。

女子について見ると、MGIS では兄弟姉妹数が少ないほど宗教的食事制限に不熱心であり、出生順位が 3 位の者が不熱心な傾向が見られる。TeO でもやはり兄弟姉妹数が少ないほど宗教的食事制限に不熱心な傾向が見られるが、出生順位の有意な効果は見られない。TeO では長子の主効果は正になり、2 人キョウダイの長子の効果は負となっているが、MGIS ではそれらの有意な効果が見られない。

**謝辞：**本報告は科研費基盤(B) (15H03417)「ムスリム・マイノリティのハラール食品消費行動の関連要因：東アジアと西欧の比較研究」(研究代表者：小島宏)の一環としてなされたものである。